

<祈りのために>

「御心が天になるごとく、地にもなさせたまえ」 マタイによる福音書6章10節

これはキリスト者の希望の祈りです。それも単なる願いではなく、しきりに願う祈りです。しかし、私たちの祈りと願いととは裏腹に、いよいよ遠く政治的・経済的状況とそれに呼応するかのように国民の精神も劣化の途をたどっている世情です。このような中で、キリスト者の役割は何であるかと思ひあぐねる日々です。敗戦後70年を経た今日、キリスト者に求められている課題は、70年前の悲劇を繰り返さないことに信仰の力を奮い立たすことです。

イザヤは、時の為政者たちが御言葉に信頼せず軍事力に頼るのを厳しく批判しました（イザヤ書2章4節、31章1節～3節）。王と為政者から避難と排斥を受けながらも、戦争の道が開かれる警鐘を鳴らし続けました。他の預言者たちも、神の戒めに背いた当時の権力者の罪を非難し、公正と正義を主張しました（アモス書5章）。それは、当時の支配者階級が貧しい者を収奪し、格差社会が広がっている現実への批判でした。彼らは、一般論としての救済や平和や国家や信仰を宣べ伝えたのではありません。特定の時代状況の特定の相手に、神の言葉を伝えたのです。それはまた、預言者たちの苦しみの発生源でもありました。

預言者の発信の多くは神の審判でした。しかし審判のみを宣言するだけでなく、また民が神の裁きを受けて苦しむのをただ傍観者的に眺めたのではなく、神の苦しみを共に担い、民のために熱心に執り成し、ときには民に代わってその苦しみを身に負いました。預言者の最大の苦しみは代償のそれでした。言うならば、預言者の苦しみは個人的な苦しみではなく、常に民の罪責を担うものでありました。

それは預言者が見張り人として立てられているからです。現在、国民は実体のない株価（資本主義、市場経済）に翻弄され、進むべき道を見出せない状況です。為政者たちが広げているのは、競争に勝ち抜こうとして、平和主義も憲法9条も人権も蔑ろにしている「格差社会」です。この実態は日本だけでないようです。NGO「オックスファム」の試算ですが、来年には最も裕福な上位1%の世界の人々の資産総額が、残り99%の人々の資産を上まわる可能性があるという報告しています。昨年のも最も裕福な80人の資産額は1兆9000億ドルで、59%の35億人の資産に匹敵したと言います。1%の富裕層の平均資産は1人当たり270万ドル（約3億1600万円）で、人口の80%層の平均資産は1人当たり3851ドル（約45万円）で、明らかに富の偏りです。

もはや教会とキリスト者は、信仰が単なる精神的元気付けや、個人の内面における「平和、安心、喜び、慰め」といった信仰に留まることの出来ない状況が突きつけられております。靖国の戦いは「靖国神社」が前面に出てくるのではありません。戦争やその他の災害の終着駅として出て来ます。それゆえに、その途中の道をも監視して戦う必要があります。今日、キリスト者に最も求められているのは「預言者」の役割ではないでしょうか。

<祈り> 「父よ、キリストに仕える者として、この世界の格差と差別のあることを直視し、最も小さな者のために執成して祈り、その苦しみを身に負う者にしてください」。

島田善次（九州中会ヤスクニ特別委員会委員長、宜野湾告白伝道所牧師）

「メンソーレ、沖縄に来てみませんか」ツアーに参加して

黒澤淳雄（横浜長老教会）

去る、2015年6月29日～7月1日の「メンソーレ、沖縄に来てみませんか」ツアーに加わせていただいた。宜野湾伝道所島田牧師や沖縄伝道所の川越牧師は連日の闘いの中で一番大切にしていることは、御言葉の説教と聖晩餐であると講演会並びに祈祷会でお話しされていた。キリストの体なる教会のこの世での在り方を、身をもって権力者に示していることを感じさせられた。お二人を中心にしてカルヴァンの「キリスト教綱要」の読書会をこの闘いの最中に続けておられることから、キリストの教会の在り方を主に尋ね求めておられる姿を垣間見ました。そのカルヴァンの『キリスト教綱要』の序文に掲載されている『フランスの王フランシス一世(宗教改革弾圧者)』に宛てた書簡内容から、この世の権力者に対するキリスト者の在り方を示されたとは私は理解した。その書簡の最後の部分の要約は以下のようである。

…王フランシス一世が偽りの告発に動かされていることに気づくように。潔白な者は主の立証を待ち望む…ということから説き起し、最後に、…あなたは今、われわれに対して根拠のない偏見を持っている。われわれはこの告白があなたの先入観を変えられるように望む。しかし、いずれにしても私たちは王の王である方に信頼する…。という内容が、今われわれが繰り返しこの国の為政者に訴え続けることだと思い起こしている。

私は、今回の「メンソーレ、沖縄来てみませんか」ツアーに参加し、「沖縄の新基地建設反対活動支援募金」に寄せられた支援金を、東京中会靖国問題特別委員会の会計係として持参し、お二人の牧師にお渡ししたところ、大変喜ばれて受け取られた。後日、川越牧師からこのツアーの会計報告があり、その中にこの支援金を基として「日本キリスト教会辺野古新基地反対運動資金」口座を設けられた。この沖縄の戦いがキリストの体の形成と宣教と平和を作り出す信仰告白の闘いであることを思い至らせられた。そしてこれから続く辺野古新基地反対運動に支援を送り続けたいと願う者である。

「今こそ平和を作り出すために」 ～戦後70年を覚えて～

2015年8月15日

日本キリスト教会北海道中会議長 八田牧人

日本キリスト教会北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会委員長 古賀清敬

わたしたちは、戦後70年を迎え、集団的自衛権行使容認の閣議決定、特定秘密保護法および「安全保障関連法案」の強行採決という平和憲法無視の政治、福島原発事故への対処

に表された人間軽視の経済政策、格差を固定して若年者と高齢者の生活を貧窮させる人権侵害の諸政策に強い懸念を覚え、このような「平和」に対する脅威に対して、あくまで反対することを表明します。

また、さまざまなデマ・恫喝・脅しによる嫌がらせにも屈せず、「戦争法案」に反対し、デモを続けている中高生と教員、学生と学者、こどもを連れた母親、老若男女の市民、宗教者、諸教会の一人一人の思いと行動に、心からの感謝と支持を表明します。これらの人々こそ「平和をつくり出す者」であり、この国の戦後 70 年の歩みの最も善き実りを体現しているというべきでしょう。

わたしたちは、この事態を評論しているのではなく、「平和をつくり出す者は幸いである」という主イエスキリストの言葉を大切な規範としているのです。また、わたしたちは歴史に向き合い、問うことを恥としません。何故なら、権力を嵩に着て、自分に都合の悪い過ちを認めず、なかったと抹消する、あるいは事実を歪め責任を転嫁することは、混乱と戦争の源となるからです。

わたしたちは「日本キリスト教会信仰の告白」の冒頭で「わたしたちが主とあがめる神のひとり子イエス・キリスト」と告白します。それは、主イエス・キリスト以外に服従すべき主人を持たないという意味です。これはわたしたちの決意であると同時に、歴史に対する責任を伴う反省なのです。

かつて、わたしたちは、その主人の支えと護りを信頼しきれずに、自分の手で「切れ目のない対応」や「防御の手段」をもって教会を自分の財産のように守ろうとして、日本に住む朝鮮の人々の教会を併呑合併し、朝鮮では教会とキリスト者に神社参拝を強要しました。戦後 45 年をかけてわたしたちは歴史に向き合い、真摯な一致した謝罪を行なうに至りました。直接、文書を携えて当地を訪れた結果、韓国、共和国、台湾の諸教会から謝罪の受け容れと和解を得たのです。

もし、わたしたちが「あれは彼らの教会を守るためにしたこと」、「当時、国策に反することは出来なかったからやむを得ない」などと主張し、自らに都合よく無罪を決め込んでいたら、いまなお反目と嫌悪が続いていたでしょう。その経験からも、植民地支配と侵略戦争を認め謝罪した村山談話、「従軍慰安婦」への国家の関与を認めた河野談話は、歴史と正しく向き合い、被害を与えた近隣諸国からの信頼を回復するために必要な正しいものであったと確信します。

それだけに、過去の清算を曖昧にしたまま謝らないで済む方便を探すような「新たな首相談話」は未来志向にはほど遠く、かえって信頼の回復を阻害し、平和への逆行となるに違いないのです。

戦前のこの国は数年に一度は軍事行動を起こし、大きく疲弊・荒廃しました。平和憲法のもと、戦後 70 年の戦争に加わらない時期を経て、その疲弊・荒廃から立ち直って来たのです。逆に、戦後世界でも変わらずに、数年に一度軍事行動を起こして来たのはアメリカ合衆国

です。安倍政権は、躍起になって「安全保障関連法案」が戦争の抑止力となると繰り返しています。しかしそれは、アメリカの戦争に常に加わり、日本全体をアメリカの防波堤として差し出すということにはなりません。矛盾という言葉の由来通り、そもそも抑止力は軍拡競争を前提としていて、敵対関係を増幅させ、戦争の危険性を増大させるものでしかありません。

また、政府の手によって、特定の外国の軍隊による侵攻の脅威が喧伝されています。「日本を守るための切れ目のない備え」をするべきだと主張されます。しかし、2011年3月11日の東日本大震災の時、自衛隊員は約20数万人が震災復興のために動員されています。いわば一番防備が脆弱だったその時期、特定の国が攻める気配を見せたでしょうか。むしろ支援のための義捐金を贈って来ています。現在の政権がマスコミ報道を統制し、他方でヘイト・スピーチを野放しにし、「従軍慰安婦」の問題をなかったことにしようともくろんでも、人間の尊厳や命に目を向けない傲岸な姿勢が真の信頼を得ることはありません。

わたしたちは、戦後70年を迎えた今日の状況に、旧約聖書の詩編第2篇に記されている状況を思い起こします。そこでは戦いの危機を騒ぎ立て、打算に満ちた「力の同盟」以外に途はないと主張し合い、見せかけの安心をふりまいています。また、政権を担う者達は新約聖書の使徒言行録第12章に記されているヘロデ王を思い起こさせます。反対する者を排除し、おもねる者に讃美の声を上げさせて満足しています。しかし、わたしたちは希望を失ってはいません。聖書にはそのような勢力や人物の支配は一時期に過ぎないことを示しているからです。

同時に、わたしたちは、一時期のことだからと、沈黙してよいと考えません。わたしたちは、キリスト者として、真の平和を求め「安保保障関連法案」の廃案と国会議員の現行憲法の遵守を強く求めます。戦後70年の今年を悪しき転換点にしてはなりません。

<お知らせ>

1. 2015年度靖国神社問題全国協議会（詳細は別紙）

〈主題〉「日本キリスト教会のヤスクニ問題との取り組み、これまでとこれから、キリストを主とする教会を建てるために」…神ならぬ天皇を神とあがめた教会の末裔

講師 加藤正勝（滝川教会牧師）

森田幸男（大阪北教会牧師）

日時：2015年10月13日（火） 18:30～20:30

会場：日本キリスト教会 蒲田御園教会

2. 「辺野古新基地反対運動支援金」基金口座送り先

沖縄銀行 坂田支店 208（電話 098 - 946 - 4311）

普通預金 1509605

名義「日本キリスト教会辺野古新基地反対運動」

728号ヤスクニ通信 2015年9月13日 発行 日本キリスト教会 靖国神社問題特別委員会 発行人 栗田英昭 編集 川越弘 印刷発行 篠塚予奈（東京告白教会） 〒157-0061 東京都世田谷区北鳥山 1-51-12 TEL&FAX03-3300-6529
